



# 米子市福市考古資料館通信

第13号

2024年6月



## 企画展1「遺跡から見つかった動物たちが集まりました。」を開催中

米子市福市考古資料館では、5月22日（水）から企画展1「遺跡から見つかった動物たちが集まりました。」を開催しています。

動物を模した土製品や動物を描いた土器など、遺跡から出土した動物に関わる考古資料を展示し、古代人と動物との関わりなどを紹介します。

会期は、8月26日（月）までとなっております。かわいい動物たちが皆さんのお越しをお待ちしていますので、ぜひ、この機会にご観覧ください。

令和6年度(2024年度) 米子市福市考古資料館 企画展1

### 遺跡から見つかった動物たちが集まりました。

動物を模した土製品や動物を描いた土器など、遺跡から出土した動物に関わる考古資料を展示し、古代人と動物との関わりなどを紹介します。



陰田隠れが谷遺跡出土の土馬

開催期間 令和6年5月22日（水）～8月26日（月）  
会場 米子市福市考古資料館  
開館時間 9：30～17：00（最終入館16：30）  
休館日 毎週火曜日 7/17（水） 8/14（水）  
観覧料 無 料

問  
合  
先

米子市福市考古資料館  
米子市福市461番地20  
TEL 0859-26-3784  
(FAXは同番号)

### 開館のお知らせ

- 開館時間 9：30～17：00（最終入館16：30）
- 観覧料 無 料
- 休館日 毎週火曜日、祝日の翌日、年末年始（12月29日～1月3日）

## 古代人と動物との関わり

### イヌ

イヌの直接の祖先はオオカミであることがDNA分析の結果から明らかとなっています。オオカミと人間は数十万年にわたり、共通の生息域及び生活環境で生活しており、互いに頻繁に遭遇していたと考えられます。このような緩やかなオオカミと人間との接触の時期には、オオカミが人が捨てた食べ残しをあさるため人の宿営地に近づくようになり、次第にイヌ化したのではないかと考えられています。

約9400年前の縄文時代早期の夏島貝塚（神奈川県）から見つかったイヌの骨が日本最古のものであり、その頃から日本にイヌがいたと考えられます。

縄文時代のイヌは、その骨に解体する際についたと考えられる解体痕が認められないことや、ていねいに埋葬された例もあり、食用ではなく、狩猟犬として飼われていました。

目久美遺跡から出土したイヌの骨には解体痕がなく、しかもイヌの糞石も見つかっています。このことから、イヌは食用ではなく、イヌが人間にとって、その当時唯一の家畜であり、狩猟の良きパートナーとして大切に飼育されていたことがわかります。

弥生時代になると、骨の一部に解体痕が見られるものがあります。大陸では、貴重なたんぱく質食料としてイヌとブタを食べていました。稲作と共に大陸からイヌを食べる習慣が伝わりました。

古墳時代には、有力者層が狩猟用、愛玩用としてイヌを飼育するようになり、本格的にペットとして飼育されるのは奈良時代以降で、平安時代にはイヌをペットとして飼育するのがブームになるほど一般的になりましたが、イヌを飼育することができたのは貴族階級に限られていました。一般人がイヌを飼育できるようになったのは江戸時代になってからです。なお、イヌを食べる習慣は幕末まで続きました。

### シカ

シカと人間のかかわりは古く、1万年以上前の洞窟の壁にシカの絵が描かれているのが世界各地で見つかっています。

日本では、縄文時代にイノシシと共に貴重なたんぱく源として食べられていました。日本語の「シカ」という語源は、肉（食肉）を意味する「シ」と毛皮を意味する「カ」が合わさったものと考えられ、古代人がシカを衣食両方の供給源と見なし、非常に近い距離で関わっていたことが窺えます。

また、シカの角は、加工しやすく丈夫なうえ、比較的大型の素材がとれることから、逆鉤（あぐ）のあるヤス先、銚頭（もりがしら）、釣り針などの漁撈具や櫛（くし）などの装身具に、中手骨と中足骨は、真っすぐな素材がとれることから、逆鉤（あぐ）のないヤス先、針、鏃（ぞく）などに利用されています。

弥生時代になると、食糧資源の中でシカの比重が相対的に低下したと考えられています。その頃からシカを「霊獣」として扱うようになり、祭祀の道具と考えられる銅鐸や、大型の土器にもシカが描かれるようになります。1年ごとに生え替わる角が稲の生育や豊作を象徴するものとして、稲作が普及するにつれて「霊獣」としての地位を獲得していきました。

古墳時代になると、シカの埴輪がつくられたり、角は加工して刀の柄（つか）などに用いられました。

古代日本で行われた占いの一つに太占（ふとまに）があります。これはシカの肩甲骨を焼いて、その亀裂の形や大きさを吉兆を占うもので、そのため、シカは聖獣として扱われました。

神社で飼われているシカは、神鹿（しんろく）と呼ばれ、神の使いとして扱われています。有名なのは奈良県の春日大社、茨木県の鹿島神宮などの歴史の古い神社です。

## ニワトリ

ニワトリは、弥生時代中期から後期の遺跡から出土した骨が最古とされており、朝日遺跡（愛知県）から出土したニワトリの骨からチャボ程度の小型のニワトリであったとされています。

ニワトリの骨の出土例は少なく、1つの集落に数羽程度が飼育され、食用としてではなく、時告げ鳥として用いられたと考えられます。

『日本書紀』の「天岩戸」の「常世長鳴鳥（とこよのながなきどり）」にもあるように、当時の人々にとって太陽の復活と信じられた朝日は鶏が鳴いて初めて登ると考えられていたことが窺えます。おそらく、人々は夜明け前に鳴く雄鶏の不思議な能力に畏敬の念を抱き、鶏は太陽神（日神）信仰を支えた時告鳥（ときつげどり）として重要視されたと考えられます。

古代には、肉食禁止令によりニワトリの肉のみならず、卵も食べることが禁止されました。

また、古代には時告げ鳥として神聖視され、主に愛玩動物として扱われました。

奈良時代には、占いとしての闘鶏が行われましたが、平安時代になると、娯楽的要素が強くなり、賭博の対象にもなりました。

ニワトリの肉や卵が多く食べられるようになったのは、江戸時代になってからです。

## 鳥

古代においては、秋になると飛来し、翌年の春には飛び去って姿が見えなくなる渡り鳥は、どこから来てどこへ去るのかわからなかったこともあり、彼岸と此岸を行き来する存在とされ、この世とあの世を往復する霊力を持った存在と考えられていました。そのため、死者の魂は鳥となって空を飛びぬけて、彼方にある死者の国へ至るという思想が生まれました。特に、大型で真っ白なハクチョウは、他の鳥よりも神聖視されていました。

また、鳥は農耕社会との関係が深く、「稲の穀霊」を運ぶものとして、あるいは境界を守る「物見鳥」として神聖視されます。こうした鳥の信仰は、弥生時代に土器に描かれた「鳥装のシャーマン」や竿の上につけた鳥形木製品、古墳時代に古墳に並べられた鳥形埴輪や鳥形木製品から窺えます。

## 馬

馬はいつからいたのでしょうか。4世紀後半の塩部遺跡（山梨県）から出土した馬の歯が日本最古のものと考えられていますが、この頃の馬具がほとんど見つからないことから、全国的に広く馬が普及していたわけではありません。

古墳時代中期になると、須恵器などの新しい文化や技術が朝鮮半島からもたらされます。それに伴って馬の飼育に関わる知識・経験をもった馬飼集団が馬と共に日本列島にやって来ました。日本での馬生産が軌道に乗りはじめるのは5世紀後半から末頃と考えられ、このことは馬具の製作開始と馬具出土古墳の数が増加し始める時期と一致します。

古墳時代の馬は、遺跡から出土した骨から、前脚の肩までの高さ（体高）が約120～130cmの小型・中型馬です。ちなみに、大型馬とされる現在のサラブレッドは体高が約150cm以上あります。

馬は主に乗馬や使役馬として使われていましたが、5世紀後半になると飾り馬用の金メッキの馬具がつくられ、また、飾り馬を表現した馬埴輪が多く見られるようになり、有力者層によって権威の象徴として飾り馬が重要視されるようになります。

また、馬は乗馬や使役馬だけではなく、神霊が乗る動物として神聖視され、雨乞いや疫病退散等のため、犠牲馬として「生き馬奉納」が行われましたが、その後は、形代としての土馬が用いられるようになります。

### 鏡に刻まれた動物たち

三角縁神獣鏡や画文帯神獣鏡、獣帯鏡などの銅鏡には、中国の神仙思想に基づいた聖獣が刻まれています。

聖獣には、龍、青龍、虎、白虎、天鹿、朱鳥、玄武があり、これらは中国の伝説上の神獣です。

青龍は、東方を守護する神獣で、春を司ります。また、青は五行説（五行説とは、古代中国に端を発する自然哲学の思想で、万物は火、水、木、金、土の5種類の元素からなるという説です。）では東方の色とされています。

白虎は、西方を守護する神獣で、秋を司ります。また、白は五行説では西方の色とされています。

朱鳥は、中国の伝説上の神獣（神鳥）で、朱雀とも呼ばれています。朱鳥は、南方を守護する神獣で、夏を司り、長生の神とされています。赤い翼を広げた鳳凰様の鳥形で表され、赤は五行説では南方の色とされています。

玄武は、亀と蛇が合体した形をとり、脚の長い亀に蛇が巻き付いた形で描かれたり、尾が蛇となっている場合とがあります。古代中国においては、亀は「長寿と不死」の象徴、蛇は「生殖と繁殖」の象徴とされています。玄武は、北方を守護する水神で、冬を司ります。黒は五行説では北方の色とされています。

### 古墳に立てられた動物埴輪

動物埴輪には、馬、牛、鹿、猪（いのしし）、犬、鶏（にわとり）、水鳥、鶺鴒（う）、猿、ムササビ、魚などがありますが、猿、ムササビ、魚はごく少数です。

動物埴輪は、人物埴輪と共に群像として配置され、以下のような、当時の人々の死生観をもとにした意図や物語性を反映しています。

首長権継承儀礼説	王位を引き継ぐ儀式の様子
殯（もがり）説	死を確認する一連の儀式の様子
生前顕彰説	死者の生前の姿を記念する
供養説	死者をとむらう儀式の様子
犠牲説	死後の世界のために犠牲にされる動物
来世・他界説	あの世の理想郷の様子
神宴儀礼説	神をまつる様々な儀礼の様子

**発行者** 米子市福市考古資料館（指定管理者 一財・米子市文化財団）  
**住所** 〒683-0011 米子市福市461-20番地  
**電話・fax** 0859-26-3784（同番号）  
**休館日** 火曜日・祝祭日の翌日・年末年始（12/29～1/3）